

福島敏夫随筆集

「乙戸南雑話「花鳥風月及び星・虹を愛でながら」から

主宰論説 37

哲学と宗教と科学技術

太古の昔から、人間は、生と死を見つめながら、人生を問い、生きがいと健康と寿命に思いをはせながらも、長らく、哲学と宗教と科学技術と深い関わりを持ってきたと言える。それで、哲学、宗教、科学技術の流れと相互関連性に、思いも巡らしてみるのも、悪くはないだろうと思われる。

哲学というと、最初に浮かぶのは、ギリシア時代の自然哲学である。「万物の根源は、土・空気・水・火による」とする4元説を唱えたイオニア学派らで代表される。次いで、ソクラテス、プラトン、アリストテレスのイタリア学派の道徳哲学である。近代に入って、デカルト、パスカル、スピノザ、ライプニッツの流れの大陸合理論と、フランシス・ベーコン、ジョン・ロックの流れのイギリス経験論から、カントの観念論を経て、ニーチェ、キエルゴールからサルトルまでの実存主義哲学に到るようだ。日本では、井上哲治郎（円了）、西田幾多郎から三木清の流れがあるようである。

宗教については、分派も含めて、多種多様なものがあり、論ずるのは、憚れるところも有り、異論も多いと思われるが、避けて通れないと思われるので、あえて、考えを述べてみたい。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の三つの重要な宗教は、いずれも、中東の砂漠地帯を起源とする“砂漠の民”の一神教のようである。また、もう一つの大きな宗教である仏陀の“仏の道”も、もともとは、“草原の民”の教えであるようだ。昔のバクトリアの故地のガンダーラ地方で起こったクシャナ朝のカニシカ王時代を起源する衆徒救済を特徴とする大乘仏教が、砂漠のオアシス経由で北伝し、アジアの各地に広まったようである。もう一つの自力更生を特徴とする小乗仏教は、南伝の形で、東南アジア諸国に広まったようである。農耕社会や漁労社会や森林社会や山岳および海洋社会では、大分部は、色々な自然のものに精霊が宿るという考えを基礎とする多神教の方が多いようである。北欧神話では、オーディンを主神とする多神教だし、ギリシア神話では、ゼウスを主神とする多神教だし、日本の神道も、天照大神を主神とする多神教である。どちらも、信仰対象が違うだけで、人間の思考を超えたものの存在を認めることと位置づけられていたものようである。

また、科学技術に対しても、少し、考えてみたい。欧米型の科学技術は、哲学や宗教からの脱却を目指して発達したものである。知的好奇心を満足させ、この世の法則性を解き明かし、物質な豊かさと日常生活の利便さを提供し、人に幸せをもたらしたという。ある程度、大量生産、大量消費、大量廃棄の欧米型の物質文明と生産体系に支えられ、人類に未曾有の繁栄をもたらした功績は

大なるものがあるようだ。しかし、昨今、地球環境問題、資源・エネルギー問題、廃棄物問題など、いろいろな問題が露呈し、大きな見直しが必要になっているようだ。融合等が唱えられることもあるが、哲学と宗教と科学技術は、今後も、競合し、相互に影響を受けながらも、平行して進むものかもしれない。

自由俳句：

いくつもの山谷川を乗り越えて今日も歩く人生行路

令和5年2月26日